

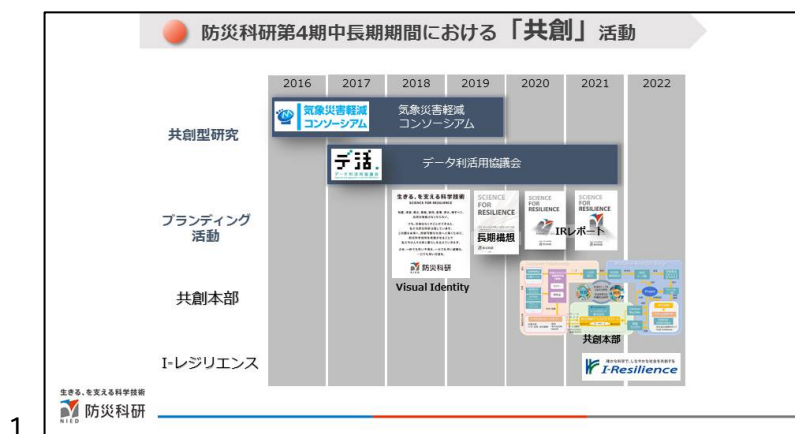
おわりに
林 春男（防災科研理事長）

今日は 3 時間半にわたる長丁場に最後までお付き合いいただきまして、ご参加いただいた皆さんに厚く御礼を申し上げます。また、このプロジェクトは 5 年間続けてまいりましたが、平田統括、サブプロ (a)、サブプロ (b)、サブプロ (c) のそれぞれの総括を務めていただいた皆さん、そのサブプロに参加して下さった研究者の皆さん、そしてデ活活動というのが非常に中心的なものだったと理解していますが、そこに深く関わっていただいた皆さんに厚く御礼を申し上げたいと思います。

この首都圏レジリエンスプロジェクトが残してきたものは大変大きいと思います。私は今中長期計画期間第 4 期の理事長をさせていただいて、6 年目が終わろうとしており、あと 1 年になりますが、4 期に入って、防災科研全体として何を目指してきたのかというと、「共創」という言葉に尽きると思います（図表1）。共創型の研究ということで、首都圏レジリエンスプロジェクトは 2017 年に始まり、今年度 2021 年に終わることになります。

それに先立ち、2016 年から 2019 年まで、科学技術振興機構（JST）からご支援を頂いて、極端気象のプロジェクトをさせていただきました。その中でも気象災害軽減コンソーシアムという共創の場をつくって活動を続けています。このような活動が先行している中で、私たち自身がどのように考えるべきか、自己定義を考え直すということ、ブランディング活動を始めました。私たちは一体何をするために集まっているのか、どのようなことをすべきなのかというメッセージを一丸となって、もっと平たく言えば、金太郎あめのように、誰もが同じことを言えるように、みんなで議論を重ねて、「生きる、を支える科学技術」を私たちは目指しているのだということで、防災科研のアイデンティティにしました。以来、それを継続的にいろいろなところで発信する活動も続けています。

国立研究開発法人では、まだ先駆けになっているかと思いますが、2020 年からは IR レポートという統合レポートも出して、自分たちの活動を毎年振り返るということも継続しています。



2020年にはIRレポートと並んで、イノベーション共創本部をつくりました。これはこれからずっと残っていく組織体になりたいと思っています。首都圏レジリエンスプロジェクトを中心に、いろいろ試みていただいた共創的な研究をより発展させる仕組みです。図表の右下はそのサイクルになっている絵なのですが、左の方にさまざまなステークホルダーがおられ、そこからのいろいろな情報を基に、マーケットインの研究を推進して、その成果を情報プロダクツとして、また社会に還元していく、こういったループをぐるぐる回していけるようにしたいのです。その反対は、プロダクツアウトということで、自分たちがやりたいことを研究すれば社会は良くなるというような発想での研究です。正直、そちらの方が圧倒的に多いと思いますが、それを逆転させるという意味でスタートしました。

そこの最後の出口として、私たちが研究した成果をユーザーに使っていただくための仕掛けとして、今日も小林社長にプレゼンテーションをお願いしましたが、2021年11月にI-レジリエンスという会社をつくらせていただきました。そこに首都圏レジリエンスプロジェクトのデ活に大変深く関わっていただいた、全部で5社で出資をしてつくった会社です。防災科研は取りあえずは筆頭株主になりたいということで、37%、拒否権があって、かつ筆頭というミニマムを確保しました。二番手には、今日嶋倉さんに出させていただきましたが、東京海上ホールディングスになっていただきました。3番目には博報堂が、4番目にはESRI ジャパンがなってくれました。この3社は、デ活の中でも非常に熱心に活動していただけた3社であり、デ活の一番具体的な成果として、3社にご出資を頂くような形で、官と民をつなぐような恒常的な仕組みが出来上がったと思っています。これまでの5年間で、首都圏レジリエンスプロジェクトで頂きましたいろいろなご知見、あるいは人のつながりというのは、共創本部やI-レジリエンス株式会社を通して、今後も継続し、できればさらに発展させていきたいと思っています。その第一歩として、気象と地震の二つを連携させた形で扱っていけるような仕組みに、これからはしていかなければいけません。ユーザー側から見れば、地震だけに備えても意味がないですし、気象災害だけに備えても意味がないわけで、オールハザードに備えられることが必要だと思っています。そのような意味で、今後もデ活で培われたものはさらに発展していくと思っています。

ここまでデ活の活動が成長できた一番の貢献者は、ずっとモデレーターをお願いしている下村さんだと思っています。

どうしても、どちらかといえばプロダクツアウト型になりそうな危険性のある人々をユーザーサイドから叱咤激励し、時には励ましていただきながら、これまで定期的にサイエンスコミュニケーターとしての役割を果たしていただいたことに、非常に深く敬意と感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。これからこのプロジェクトは終了しますが、そのスピリッツ、東京都風に言えばレガシーなのかもしれませんが、それはこれからも引き続いていくということを確認させていただいて、最後の言葉にしたいと思います。

5年間、そして今日一日、本当にありがとうございました。